

東日本大震災における 災害ボランティア活動が拓く可能性

渥美公秀

要約 本稿では、まず、筆者自身が関わってきた災害NPOの活動を通して、東日本大震災における災害ボランティアの活動を紹介した。次に、災害ボランティア活動が、現代の日本社会を変革していく可能性について、事例と対応させながら整理した。最後に、災害ボランティアを含む社会について展望を示した。

はじめに

東日本大震災では、あまりにも多くの尊いのが失われ、そして数え切れないほどの人々が住んでいた場所を追われ、不自由な生活を強いられている。さらに、原子力発電所が起こした事故が重なったため、故郷へ帰ることに希望さえ持てない多数の人々が、各地に点在して暮らしを営まざるを得なくなっている。そこには、想像を絶する悲しみがあり、安易な同情を寄せ付けない苦しみがある。まずは、亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被害に遭われた方々に心からお見舞いを申し上げたい。

災害が発生すると、災害以前から社会に潜在していた諸問題が、明確な輪郭をもって人々に認識される。例えば、2004年の新潟県中越地震では、被災した集落の復興が叫ばれたが、それは、地震前から悩まされてきた過疎問題への対応でもあった。マイノリティについても、本来そうであってはいけないとはいえ、ようやく、災害を経て、顕在化する。例えば、1995年の兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）の被災地には、被害が集中しているにもかかわらず、支援の対象から漏れてしまったり、適切な支援が受けられなかったりする障がい者、高齢者、女性、

外国人らが存在したが、大震災を経て、ようやく多くの人々に認識されていった。それから16年が経過して発生した東日本大震災の被災地でも、被災したマイノリティへの配慮が、発災から時間が経過して、ようやく浸透してきている。実際、筆者らが、外部支援者として発災直後の被災地を訪問しても、例えば、障がい者についてなかなか実態が見えてこなかった。時間が経過し、仮設住宅にスロープが取り付けられて、やっと車椅子の利用者の存在がわかったことさえあった。

しかし、災害が一つの契機となって、顕在化した問題に対しては、専門家や市民＝ボランティアによる対応が始まる。阪神・淡路大震災の時にも、専門家やボランティアを中心とする団体がマイノリティに向けた支援をいち早く展開した。例えば、外国語で情報を伝える地域FM局が独自の活動に取り組み、女性や高齢者に焦点を当てた多様な活動が行われたことによって、被災したマイノリティが、支援や復興の過程から“完全に”排除されることには、かろうじてならなかった（「第12分科会 反差別国際連帯の課題」、2006）。障がい者支援に関しても、その必要性を感じた市民・団体が、障がいに合わせた細やかな支援を柔軟に展開したこ

とが報告されている（八幡, 1995；松村, 2004）。そして、東日本大震災でも、各種団体とそこに関わるボランティアが、被災したマイノリティに対する細やかな支援を展開していることは事実である（内橋, 2011）。

このように、大震災と人権に関して、平常時から、十分に課題が共有され、議論が進展し、備えが整っているとは言いがたいのが現状ではある。しかし、災害によって絶望で覆われた現場に、かすかに希望の灯が見えないことはない。多くの地元住民やボランティアが相互に助け合う姿であり、近隣からまた遠方から駆けつける市民＝災害ボランティアの活動である。

そこで本稿では、人権が脅かされる個別の事例に立ち入って議論を展開するのではなく、災害ボランティアによって、人権に関わることを含む現状の諸問題が緩和され、諸問題を取り囲む規範（妥当な行為群を指定する操作）が変革される可能性について一般的に検討する。言い換えれば、問題を含みながらも安定してしまっている現状・規範を変革するにあたり、災害ボランティア活動にいかなる希望を見いだせるのかということを検討する。

以下では、まず、東日本大震災における災害ボランティアの活動を紹介する（第1章）。その際、災害ボランティアのなかでも、筆者自身が関わっている災害NPOの活動を通して、災害ボランティアの活動を描写する。次に、災害ボランティア活動が、現代の日本社会を変革していく可能性について、事例と対応させながら整理する（第2章）。最後に、災害ボランティアを含む社会について展望する（第3章）。

1 東日本大震災における災害ボランティア活動の事例

2011年3月11日、東北地方太平洋沖地震の第一報が入った直後から、（特）日本災害救援ボ

ランティアネットワーク（NVNAD、兵庫県西宮市）では、各方面と連絡をとりあいながら、救援活動を開始した。発災後、数日のうちに、それらは、被災者支援、避難者支援、後方支援という三つのプロジェクトとして整理され、それぞれを全力で行うことになった。本章では、被災者支援と避難者支援について、開始の経緯や活動内容、そして、現状と展望について紹介する。

1 被災者支援～「北から」プロジェクト

東日本大震災の被災地は、実に広い。どこへ救援に向かえば良いのか？ 全国の災害NPOの関係者からは、東京で大きな動きが生まれるというニュースが伝わってきた。しかし、筆者は、一抹の不安を覚えた。果たして、緊急時に、多種多様な人々が一堂に会して、被災者のいのちや暮らしに関わることがらについて、被災者本位の決定を矢継ぎ早に下していけるだろうかという不安である。常々、迷ったときには、原点に戻れば良いと考えてきた。NVNADの原点とは何か。筆者にとっては、自分が被災した“あの日”（1995年1月17日）から過ごした西宮の風景である。あの時、そっと傍にいてくれた人々の姿である。だから、NVNADに参加し、今は団体を預かるなかで、NVNADは被災した人々の傍に行き、一人ひとりが少しでも救われ、希望を持てることを願って活動してきたつもりである。そうであれば、今回も、まず、被災者の傍に行けるように動くことが優先される。中央に集結してネットワークを構築する努力には大いに敬意を払いたいが、残念ながら、NVNADには、そのために割ける労力はない。そこで、仮に単独であっても、被災した人々の傍に行くことを考えた。

NVNADでは、これまで、いわゆる主たる被災地であるかどうかということには関心を示し

てこなかった。むしろ、注目を集めないかもしれないが、それゆえに困っている人々の傍に行くことを続けてきた。例えば、新潟県中越地震では、全国から注目を浴びた山古志村ではなく、その隣の塩谷集落（小千谷市）で出会いがあった。塩谷住民とは、今も復興支援という流れのなかで関わりを継続している。そうであれば、東京からの支援活動が届きにくいと思われる北部に照準を定め、そこが“いわゆる主たる被災地”であるかどうかにかかわらず、出会いが生まれる場所があれば、そこに行くことにした。

そこへ理事の一人からニュースがもたらされた。阪神・淡路大震災後の夏休み、西宮市には、遊び場所を失った子どもたちが大勢いた。その時、子どもたちを招いて、遊ばせてくれた人々が、青森県八戸市に在るという情報である。当時、八戸市に招かれた子どもたちは、今や成人し、東日本大震災で八戸市が被災したことを知り、NVNADには、八戸市に救援に向かって欲しいという声をあげているということだった。お礼の気持ちを込めて八戸に向かうことに、誰一人反対するメンバーはなかった。

理事や研究仲間とともに、八戸市社会福祉協議会を訪問した。ここで、西宮市の子どもたちを八戸に招いてくれた人物にも会うことができた。翌日、久慈市、野田村、そして、旧田老町（現宮古市田老）まで南下し、被害状況を把握することになった。八戸でも南が大変と聞いていたが、久慈市でもまた南が大変と聞いた。そして、久慈市から野田村に入った途端、言葉を失った。何もかも流され、残った民家もあちらこちらに“流れ着いている”状況が目に入ったからだ。

NVNADの事務所では、現地報告をもとに、野田村で救援活動を展開することを決めた。八戸から野田村へと、北から南へ活動を展開することから、「北から」プロジェクトと命名し、

八戸や弘前の諸団体と連携していく必要性も併せて検討した。

NVNADでは、3月29日のボランティアバスを皮切りに、ほぼ月1回のペースで、西宮から野田村へバスを運行してきた。車中泊18時間の往路、現地では2日間活動し、また18時間の夜行バスで帰るという強行スケジュールではあるが、いつも20名程度の定員がすぐに満席になる。バスが現地に到着する前に、スタッフが野田村に向かい、現地災害ボランティアセンターなどと受け入れに関する打ち合わせを行う。

現地に災害ボランティアセンターが設立されても、被災した人々からいわゆる“ニーズ”がすぐに届けられるわけではない。そこで、NVNADでは、瓦礫処理などの活動とともに、被災した人々の戸別訪問を独自に行った。参加したボランティアからは、「津波に流された時の状況やその時の怖かったお話をして下さった。また来ると約束してきた。“生きていく希望が見えた”と喜んでくださってうれしかった」とか、「床下の泥かき。ボランティアの人がここまでして下さったと、強く感謝したいとの想いを言っただき、涙がでてきてこの活動に参加できたことが有意義だった」といった感想が寄せられた。

ゴールデンウィークの間に、NVNADスタッフらは、八戸、次いで、弘前を訪問し、ネットワークを形成して、野田村の支援にあたることに合意をとりつけた。ネットワークには、八戸工業高等専門学校、八戸工業大学、八戸市社会福祉協議会、八戸市青年会議所、弘前大学人文学部ボランティアセンター、津軽衆野田村応援隊、弘前市社会福祉協議会など、被災地に近い団体が加盟するとともに、NVNADやNVNADのバスを利用して現地でのボランティア活動を続けてきた関西学院大学や大阪大学の学生グループ「すずらん」もメンバーとなり、また、

全国各地の個人ボランティアも登録することになった。そして、ネットワークの名称として「チーム北リアス」が採用され、地元の人の協力で現地事務所も設置し、緩やかなネットワーク活動を展開しはじめた。現地事務所は、仮設住宅支援の拠点となることだけを意図したものではない。実は、長期にわたる復興に向けて、野田村の住民と、外部者であるボランティアが議論していく場になることも目指していた。

発災から2カ月を迎える頃、野田村で最初の仮設住宅128戸が野田中学校グラウンドに完成し、5月14日、15日に入居が始まった。NVNADからのボランティアは、避難所から仮設住宅への引っ越し作業を手伝った。もとより津波ですべてを流されてしまった人々が多く、いわゆる力仕事はほとんどない。軽トラックなどに少しの荷物を積んで、仮設住宅に来た人々に声をかけ、荷物を一緒に運ぶ。荷物のなかに、組み立て式の棚があったりする。ボランティアは、持ち主と一緒にあって、棚を組み立てながら、対話を進めていく。また、いくら荷物が少ないとはいえ、荷物が入っていた段ボールなどが出る。狭い仮設住宅の中に置いておくとよけいに狭い。そこで、ボランティアが各戸をまわり、段ボールを回収していく。駐車場には区画を分ける線は引かれていて、書類には家の番号と駐車場の位置が記されていたが、初めての場所ではいちいち確認するのは難しい。そこで、中学校から石灰のラインマーカーを借って、書類に記された番号を区画ごとに書いていった。こうした作業一つひとつをこなしながら、出会った人々と会話をしていく。そうすることで、仮設住宅に顔見知りの人々が徐々に増えていく。翌日、同じ家を訪問すると覚えていてくれる人もいる。引っ越しに伴う作業も、被災した人々と一緒に、話をしながら丁寧に行うことで、今後の仮設住宅の戸別訪問活動へとつながっていく。

仮設住宅への入居から半月ほどが経過した6月5日、6日には、NVNADと関西学院大学社会学部との合同で2台のバスが野田村に到着した。仮設住宅の敷地内で、足湯、子ども遊びなどのイベントを行った。その際、2009年夏、水害に見舞われ多くの死者を出した兵庫県佐用町から、特産のひまわりの種が届けられ、用意されたプランターに仮設住宅に暮らす人々と一緒に植えていった。また、神戸の企業（株）フェリシモの社員が中心となって、神戸にある様々な企業から協力を得て、「なくてもいいけど、あったらいいな」という物資を届けてもらった。この活動は「エール・フロム・神戸」と呼ばれ、その後も野田村、新潟（後述）、さらには、NVNADと付き合いのある福島県郡山市や宮城県栗原市の団体にも届けてもらっている。野田村に届けてもらったお菓子などは、ボランティアが仮設住宅を一軒一軒訪ねながら、手渡しし、そして、対話を積み重ねている。

筆者自身は、現地滞在を続け、イベントの前には現地で調整し、イベントの後には、協力してもらった各方面にお礼の挨拶に伺っている。そして、イベントのない日には、仮設住宅をぶらりと訪れ、あちらこちらで顔見知りになった人々と話をし、またそこから知り合いが広がっていている。仮設住宅には犬が数匹飼われているが、外にいる犬とは毎日会って、住民との犬談義にも花が咲いている。また、仮設住宅集会所で保健師によって開かれる健康相談会や、包括支援センターによって開かれる「なごみ体操教室」にも参加して、交流を深めている。こうした日頃の何気ない会話のなかに、体調のこと、様々な悩み、仮設住宅の住み心地、そして、津波の前の野田村のこと、復興のことなどが出てくる。決して、いわゆるインタビューをしているわけではない。むしろ普通の世間話として、多様なことを聞き、考えている。

2 避難者支援～「被災地のリレー」

東京電力福島第一原子力発電所が津波によって損傷し、大量の放射性物質を放出したことを知ったとき、真っ先に頭をかすめたのは、多数の人々が、命からがら救いを求めて被災地を脱出する姿であった。そして、できるだけ早く、遠くへ逃げてほしいと願った。チェルノブイリ原発事故の惨状が胸に浮かんだからだ。そして、関係者から市民への情報開示が、正確かつ適切に行われるかどうかが決め手になると考えた。災害NPOとしてのNVNADでは、被災地から避難する人々をどこでどう受け入れるのか、そして、避難してきた人々への支援をどのように展開すれば良いのかということを検討した。

福島県に隣接する新潟県には、NVNADが救援活動、復興支援活動を通して、継続的な関係をもっている地域がある。2004年の中越地震で3人の子どもを亡くし、49軒あった集落が20軒になった塩谷集落（小千谷市）と、2007年の中越沖地震で大きな被害を受けた刈羽村である。NVNADでは、塩谷集落と刈羽村との交流を手伝ったり、1月17日に西宮に来てもらったりしてきた。

まず、刈羽村社会福祉協議会に電話を入れた。すると、「今、福島から避難者の方々が来られました！」という声が飛び込んできた。中越沖地震の時に、全国のボランティアに助けてもらったので、そのお礼をする機会だと思って待っていたそうである。そこで、NVNADへの支援金を充当し、必要な物品を揃えてもらうようお願いした。

次に、小千谷市の復興支援員に電話すると、小千谷市は、福島からの避難者をまずは民泊で受け入れるとし、200軒を超える家庭が受け入れを表明した。平時から、グリーンツーリズムの一環として、都市部の中学生を民泊させてい

た経緯はあるものの、これだけ多くの家庭が避難者を受け入れようとした背景には、中越地震で助けられたことへのお礼という気持ちがあったことは間違いない。同市内の塩谷集落でも3軒が受け入れを表明した。塩谷集落では、さらに話を進めて、集落全体として受け入れることを計画中とのことであった。中越地震を経験した小千谷、中越沖地震を経験した刈羽の人々が、東日本大震災で被災した福島県の人々を支援することを、阪神・淡路大震災を経験したNVNADから支援することにした。NVNADでは、これを「被災地のリレー」と呼んでいる。

発災から1カ月ほどが経過した頃、刈羽村では、村内5カ所の避難所に40世帯119人が避難し、避難所以外にも知り合いなどを頼って208人が避難していた（4月21日現在）。津波で何もかも失い、とるものもとらずに避難バスに乗り込んだという人々もいた。農地も農機具も失い、呆然としていた姿が目につく。一方、津波を免れ、家屋もまったく無事であるが、放射性物質という見えない災厄のために、故郷を離れざるを得なかった人々もいた。いつになったら帰れるのか！と怒りを露わにする人もいた。刈羽村社会福祉協議会の人々が精力的に支援を展開し、刈羽村の住民がボランティアとして登録して、様々な手伝いをしていた。

小千谷市では、1週間の民泊を終え、体育館に設置された避難所生活を経て、二次避難所となった企業（越後製菓・SANYO）の寮、あるいは、市営住宅に移っていく流れとなっていた。発災から1カ月ほどが経過した時点で、二次避難所を訪問した。主として南相馬市から避難している人々が暮らしていた。避難者をずっと見守ってきた小千谷市民がいる。2004年小千谷市内で、中越地震に被災し、実家が大変な被害に遭った。その時に、各地からのボランティアに助けてもらったことの恩返しをしようと、3月

から欠かさず毎日、避難者の間を歩き、対話を重ねてきている。避難者に話を聞いた。90歳を超える夫婦は、心臓に病があり、3月17日に小千谷市に来てからも、地元の病院に通っている。病院が遠く、臨時のバス停からバスを利用しても時間が合わなかったりしてタクシーを利用するという。小千谷市が、他市に先駆けて一時帰宅を行ったときに戻ってみたら、家の被害がさらに増していたという。「それでも、津波ですべて失った人もいらっしゃるから…」とうつぶし加減で話す姿には、見ていられない思いがした。また、寮の部屋を見せてくれた人もいた。一人住まいで、避難先であるとしても、生活感が薄い印象をもった。津波で家族全員を亡くした人とのことだった。

小千谷市中心部から車で20分程度山に入ったところに、塩谷集落がある。集落では5月の終わりに田植えが行われる。2008年に“開校”した塩谷分校という集落有志の会では、毎年、田植え交流会を開催し、大阪大学や関西学院大学、地元の長岡技術科学大学の学生などと交流してきた。2011年の田植えの打ち合わせをしているときに、福島から避難している人々を田植えに招こうという話になった。そこで、案内を出したところ、数名の避難者から参加申し込みがあった。NVNADから参加した学生ボランティアも含め、みんなで一緒に田んぼで汗を流し、夕方から、恒例の交流会が始まった。交流会の終わりには、福島から避難している人々からお礼の挨拶があり、帰り際には「小千谷に来て一番楽しい時間だった」という感想を述べて塩谷集落を去って行った。後片付けをする塩谷集落住民は、満面の笑みを浮かべ、もう次の交流へとプランを語っていた。実際、その後、夏野菜を届けるなど、心のこもった交流へと発展している。

刈羽村では、住む場所が見つかって避難所か

ら出て行く人々もいたので、分散していた避難所が、社会福祉協議会の建物に集約されていた。入浴施設や調理施設がある場所だったので、ここでピザを焼いて食べる会が催された。ピザの焼き方を教えるのは、福島から避難している人々で、刈羽村の人々やNVNADから参加したボランティアは、作り方を教えてもらって、食べる役回りとなった。刈羽村社会福祉協議会の職員が、いつも底抜けに明るい声で、避難している人々に声をかけて、何かと一緒に作業をしてきた積み重ねがあるからだろうか、調理中も笑いが絶えない楽しい場となった。できたてのピザを囲んで、あちらこちらで話の輪ができた。福島の人々、刈羽村の人々、そして、NVNADの学生ボランティアらが、時には、被災したときの話、時には、刈羽村での生活、そして、時には、故郷へ帰ることについて、語り合う姿が見られた。

2 災害ボランティア活動が拓く可能性

現代の日本社会に閉塞感を感じる人々は多いだろう。職場を通じた人間関係は希薄になり、伝統行事や共同作業を通じて維持されてきた共同体が弱体化し、人々の絆が失われたという声を耳にすることは多い。Bellah (1985) の表現を借りれば、「ライフスタイルの飛び地」が広がっている社会である。人々は、相互依存的ではなくなり、政治的な行動を共にすることもなく、歴史を共有しようとする傾向もなく、ただ生活スタイル(消費性向、余暇の過ごし方など)によってアイデンティティを表現するというわけである。「ライフスタイルの飛び地」が広がる社会で、人々が連帯する機会は失われ、共同体が消滅していく。

「災害ユートピア」(Solnit, 2009)が描くのは、こうした閉塞感に満ちた社会が自然災害やテロ

のような危機に直面したときの人々の反応である。残念ながら、人々がパニックに陥って、略奪を繰り返して暴徒と化すという“信念”をもち、人々を暴徒から保護し社会の秩序を維持するためと称して出動する人々もいる。しかし、これは、現場を知らないエリート層がパニックに陥っていることを示しているに過ぎない。実際、現場では、人々による無償の行為が行われ、人々は、喪われていた一体感を取り戻すからである。「もし今、地獄の中にパラダイスが出現するとしたら、それは通常の秩序が一時的に停止し、ほぼすべてのシステムが機能しなくなったおかげで、私たちが自由に生き、いつもと違うやり方で行動できるから」(p.19)であり、パラダイスへの扉は地獄の中にあるとしている。

危機的な状況にあって、パラダイスへの扉を開けて進むのは、地域の住民や様々なボランティアである。本章では、第1章で紹介した災害NPOによるプロジェクトに言及しながら、東日本大震災における災害ボランティアが、パラダイスへの扉を確かに指し示していることを検討してみたい。

1 「北から」プロジェクト(被災者救援)が指し示す扉

被災者救援の現場からは、二つの扉の存在を提示しておきたい。被災者救援を展開する被災地の現場では、既存の安定していた規範が失効している。つまり、災害前には妥当であったことが妥当でなくなり、思いもよらないことが生じたりしている。そこで、被災者救援は、新しい規範を形成する契機となる。ここでは、まず足湯に代表される身体接触到言及し、次に、制度との関係に注目する。

1. 身体接触の意義～ただ傍にることから

災害ボランティアは、被災地へと駆けつけ、被災者の傍に行く。「北から」プロジェクトでは、

初期の戸別訪問や、仮設住宅等での足湯などがこれにあたる。実は、被災者の傍にることによって、どちらが支援者で、どちらが被災者が融合してしまうことを体験することがある。そして、このことは、既存の規範を変革していく契機となる。ここでは、足湯を事例として考えてみる。

足湯は、文字通り、被災者の身体に接触しながら、被災者のつぶやきを聴き取る活動である。その声の中には、被災者の体調や悲しみ、苦しみ、生き甲斐、経済的困窮など様々な事柄が含まれている。また、足湯を行うボランティアの学生を気遣う言葉さえ聴かれることがある。もちろん、被災者の声の中に即時に対応すべき事柄がある場合には、適切な機関(医療機関、ボランティアセンターなど)と連絡をとって対応するが、通常は、被災者の声に耳を傾けるだけである。

足湯を行う災害ボランティアは、被災者の足や手に触れ、被災者とまなざしを交わし、被災者の声を聴いている間に、被災したのは私であつたかもしれないという印象をもつことがあるという。事実、足湯に参加した学生ボランティアの記録には、「話を伺っていると、私が被災したように思える」という感想がある。皮膚と皮膚の接触という字義通りの身体接触や、見つめ合うといった視線の接触が、両者のいわば溶け合うような交流を生みだし、その時、相手の言葉を自分の言葉として聴き、理解するといったことが起こるのである。

足湯ボランティアは、被災者の傍にいて、身体接触を通して共時的な経験を重ねていく。そこから、被災したのは私かもしれないという相互反転性のなかで、被災者と「溶け合う」関係に至るのである。その結果、足湯のメンバーは、被災者の発する言葉を、自分の場でもなく、被災者の場でもない、文字通り間身体性の領域に

において、わが事のように受け取り、その言葉に反応していくことができるのだろう。

実は、複数の身体が、溶け合うことを基点として、新しい規範が生じることがある。この規範形成・変容・維持過程については、大澤(1990)の社会学的身体論に沿って、平易に解説している杉万(2010)が読みやすく入手しやすいので、ここでは触れない。ただ、既存の規範の安定性が揺らいだ被災者救援の場面において、足湯という身体接触を伴う災害ボランティア活動は、新しい規範を形成する契機になりうる。そして、新しい規範には、人権への配慮が深まっている可能性もある。

2. 災害ボランティアと制度～8対2から10対2へ

災害ボランティアは、想定されていなかった事柄に気づき、創意工夫をもって対処できる可能性を持っている。ここで、支援が10項目にわたって想定されているとしよう。さらに、行政や企業で対応できることは8項目しかないとする。もちろん、行政や企業が対応できないからといって、何も災害ボランティアがその埋め合わせをする義務はない。しかし、それでは、支援から取り残される被災者が出てくる。そこで、さしあたって、災害ボランティアが残りの2項目を埋めることはできるだろう。こうして、災害ボランティアの力によって、支援が進む。このような支援活動を、ここでは、「8対2の活動」と表現しておこう。ただ、これは第一段階である。

当然ながら、想定した支援で十分ということは、まずありえない。つまり、想定されていなかった11番目(12番目…)の支援項目が浮かび上がってくる。新しく追加された11番目の項目は、最初の10項目以外の無数の項目の中から、現場で選び取られるから、既存の制度では対応できない。そこで、災害ボランティアが必要と

なる。災害ボランティアは、臨機応変に、創意工夫をもって対応しうるからである。例えば、災害ボランティアが取り組む瓦礫処理や被災者の戸別訪問は、どちらも想定された支援の一つであろう。ただ、瓦礫処理をしていると写真が出てくることがある。一方、戸別訪問をしていると写真がなくて悩む声に出会うことがある。当初、瓦礫から出てくる写真に関する支援は、想定されていなかった。すると、災害ボランティアは、写真を一枚一枚丁寧に洗浄し、分類し、展示して引き取ってもらうという活動を展開する。この活動は、災害ボランティアだからこそできる活動の一つである。このような支援活動を「10対2の活動」と表現しておこう。これがボランティア活動の第二段階である。

振り返って考えてみれば、震災と人権、あるいは、広く人権一般に関わる場面(例えば、地域における外国人との共生)でも、様々な制度を前にして、同様の課題に直面する。災害ボランティアが示す8対2の活動から10対2の活動への移行は、人権に関わる活動を一步進める契機とならないだろうか。

2 「被災地のリレー」プロジェクト (避難者支援)が指し示す扉

被災経験を持つ人々が、新たに被災を経験している人々に対して救援活動を展開するとき、それを「被災地のリレー」と称してきた。筆者自身の体験では、被災地のリレーには、大仰な活動計画や交流プログラムは不要である。なぜなら、被災者どうしが出会うとき、黙って抱き合い、手を取り合い、目を見つめ合って涙ぐむという風景が展開されるからである。実際、塩谷集落住民が、福島県から小千谷市に避難している人々と田植えを通じて始めた交流は、その後、夏野菜をプレゼントする活動へと発展し、福島県に建設された仮設住宅へと転居するときには、互いに涙ぐみながら手を取り合う場面へ

と発展している。こうした活動は、筆者自身も体験してきた。例えば、団体名と所在地（兵庫県西宮市）を書いた腕章をつけて被災地を訪れると、必ず、腕章に目を留め、手を取って「ありがとう」と涙ぐんでくれる人々がいる。それ以上の言葉は不要である。また、中越地震で被災した小千谷市の住民が、中越沖地震で被災した刈羽村の住民を仮設住宅集会所に訪れたときも同様であった。出会った途端、塩谷集落住民と刈羽村の仮設入居者が堰を切ったように、それぞれに語り出し、涙と笑いの場となった。

では、被災経験を持つ人々どうしが交流するとは、どのような事態であろうか。普通は、同じ苦しみを知っているから、同じ悲しみを体験しているからわかり合えるという風に説明される。しかし、当然ながら、両者の苦しみや悲しみは同一ではない。そもそも、特定の被災者が、特定の災害に遭遇した経緯や、その結果抱えている苦しみや悲しみについて、他者が知るよしもない。そうではなく、災害に遭遇することが、どれだけ苦しく悲しいことであるかを互いに知っているということである。さらにいえば、そう簡単には、理解してもらえない、苦しみや悲しみがあるということ、そのことを互いに知っているということである。言い換えれば、互いに決してわかり合えない苦しみや悲しみというものが存在することが、共通に理解されているということである。共感の不可能性に関する共感をもつ機会が、被災地のリレーだと言えよう。

共感の不可能性に関する共感は、少し一般化して考えてみると、何も災害による苦しみや悲しみでなくてもみられる。例えば、恋心の痛みは、自分にとっては、決して他人には理解できない(されたくない)ほど私的な痛みであるが、そういう痛みを経験している人が他にもいることだけは共有している。また、死は、決して共

有されないということだけが人々に共有されている。

実は、共感不可能性を共感することが、痛みや悲しみを和らげるとする報告がある。被災地のリレーが示唆していることは、共感不可能性に関する共感、共有不可能性に関する共有が、人と人とをより強力に、より深く結びつけるということである。ここに、震災と人権について考察するための扉が見えている。

3 災害ボランティアを含む社会への展望

災害によって、既存の規範が揺らぐとき、災害ボランティアが新しい社会への扉を指し示す可能性を示してきた。本章では、このことをもう少し広い文脈に置き換えて検討しておきたい。

柄谷(2010)は、社会構成体の歴史を交換様式に着目して検討した。ここでは、まず、「平等—不平等」、「自由—拘束」の二つの軸を掛け合わせて、A(贈与と返礼)、B(収奪と再分配)、C(商品交換)、D(Aの高次元での回復)という四つの交換様式があること(図1)、次に、社会構成体は、四つの交換様式の複合であることを理解しておきたい。例えば、未開社会ではAが支配的であるが、BもCも併存し、国家社会ではBが支配的となり、資本制社会ではCが支配的である。そして、現代社会は、A、B、Cという交換様式をネーション、国家、資本が相互に支え合うような構造をもっているとされる。ここで考察しておきたいのは、交換様式Dである。交換様式Dでは、普遍宗教やアソシエー

図1 四つの交換様式(柄谷, 2010より)

	拘束的		
不平等	B 略取と再分配	A 互酬	平等
	C 商品交換	D	
	自由		

シヨニズムが例示され、BやCによって抑圧されていたAが高次元で回帰したものとされる。ここで、回帰は、人々がAを古き良き時代として懐古的に願望してその回復を願うのではなく、人々の意に反して、回帰してくるのだとされる。より具体的にいえば、閉塞感をもちながらも、現在の社会を敢えて変える必要もないし、変革することもできそうにないと人々が感じているその矢先に、回帰してくるのが交換様式Dであるとされる。

交換様式Dは、贈与をもとにしている。贈与は、相手が欲するか否かを第一義とせず、物や時間や労力を端的に相手に手渡ししてしまうことである。通常は、特定の相手に対して行われる。また、贈与は、暗黙であれ、返礼を期待しているが、返礼さえも期待しない場合、これを純粋な贈与と呼ぶ。

贈与と対を成すのは、交換である。交換には、何と何がなぜ交換できるのかということについて、予め相互の了解が成立していることが前提になる。それに対し、贈与は、そういった了解が予め成立していない。したがって、贈与を受けた相手にとって、それは常に思わぬプレゼントになる。

しかし、交換様式Dは、Aのように、いわば顔が見えることを前提とする贈与ではない。そして、その贈与は、返礼を期待しない純粋な贈与である。言い換えれば、交換様式Dで生じるのは、不特定多数に対する純粋贈与である。無論、そんなことは実現不可能に見える。端的にあり得ないと思われる。だからこそ、まだ実現していない交換様式として措定されている。別言すれば、交換様式Dは、資本でも、国家でも、ネーションでもないから、そうそう簡単には想像できない。

しかし、交換様式Dは、他の交換様式との複合として、ちらちらとすでに現れていると考え

てみたい。では、どこに現れているだろうか。まさに、社会が危機に面したときに見られる利他的行動に、災害ユートピアに現れている。より具体的には誰のどのような行為に現れるだろうか。それは、災害ボランティアによる救援活動に現れているのではないだろうか。

筆者自身が、

近代社会の黄昏というボランティア社会全体の背景を射程に入れて考えるならば、個々のボランティアには、有用性の彼方に開ける「歓び」の世界が展望される。(中略)

それ自体として生の充溢であり、歓喜であるような領野がボランティア一人一人に開ける。(中略) ボランティア社会には、近代社会の価値を超えた新しい生のあり方が垣間見えるように思われる。(渥美, 2001, p.65)

と書いて指し示していたことと、交換様式Dとの距離は近い。

実際、第1章で示したような災害ボランティアは、相手を特定せずに、贈与し続けている。当然ながら、災害ボランティアは、被災した人々であれば、分け隔てなく贈与を行う。しかも、災害ボランティア活動は、純粋な贈与として現れる。例えば、足湯でつぶやきを聴くとき、瓦礫から拾われてきた写真を洗って展示するとき、共感不可能であることに共感して涙を流すとき、災害ボランティアは、時間や行為を相手に渡すが、そこに返礼は求めない。さらに、相手は特定されない。

想定外の事態に対応し、不特定の人々に純粋な贈与を繰り返すという災害ボランティアの特徴は、現在の日本社会の趨勢と好対照を成している。社会の主流は、当面、市場至上主義(交換様式C)である。そこでは、貨幣に代表される価値が偏重され、それを予め共有していることを前提に、特定の相手との間で交換が発生す

る。相手を特定しない思わぬ贈与、ましてや、返礼を求めない純粹贈与は希である。その結果、多くの人々が、閉塞感に満ちた殺伐とした社会に生きていると感じてしまう。そんな社会において、想定外に創意工夫を凝らし、不特定の人々に純粹贈与を繰り返す災害ボランティアという存在は、一つの光明に見えてこないだろうか。

もちろん、想定外の事柄への対処や不特定の人々への純粹な贈与は、何も災害ボランティアだけが行うのではない。むしろ、これらは、今日の日本社会が知ってはいるけれども忘れていたこと、あるいは、抑圧していたことでもある。災害ボランティアは、我々が抑圧してきたことを解放してくれる存在なのである。臨機応変に行動し、不特定の人々に贈与し続けることが浸透すれば、現状とは随分と異なる社会が見えてこよう。

参考文献

- 渥美公秀 (2001) 『ボランティアの知』大阪大学出版会。
- Bellah R. N. et al. (1985) *Habits of the heart: Individualism and commitment in American life*. New York: Harper & Row. 島 蘭 進・中村圭志 訳 (1991) 『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』みすず書房。
- 「第12分科会 反差別国際連帯の課題」(2006) 『部落解放』562, 253-268。
- 八幡隆司 (1995) 「悲劇のなかで忘れさられたもの～障害者の救援活動」『部落解放』388, 27-31。
- 柄谷行人 (2010) 『世界史の構造』岩波書店。
- 松村敏明 (2004) 「震災と障害者～この10年をどう点

本稿では、東日本大震災における災害ボランティアの活動を紹介し、そこに拓ける新しい社会への展望を模索してきた。ただ、新しい社会への扉の存在を指し示したに過ぎず、その扉から入って議論を行うことはできなかった。本稿では、災害ボランティアが、被災した人々と直接に接触し、新しい規範を紡ぎ出していること、そして、それは既存の制度を超えて作用していること、さらに、被災の苦しみや悲しみを理解するというよりも、一歩進んで、共感不可能であることに共感しているという深みをもっていることを確認したに留まる。筆者としては、災害という悲劇のなかで、相手を特定せずに、贈与を繰り返す災害ボランティアの存在に、人権に配慮した新たな規範をもった新しい社会への希望を見いだしたいと思う。

検するののか』『ひょうご部落解放』114, 40-44。

- 大澤真幸 (1990) 『身体の比較社会学 I』勁草書房。
- Solnit, R. (2009) *A paradise built in hell: The extraordinary communities that arise in disaster*. New York: Viking. 高月園子 訳 (2010) 『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』亜紀書房。
- 杉万俊夫 (2010) 「『集団主義—個人主義』をめぐる3つのトレンドと現代日本社会」『集団力学』27, 17-32。
- 内橋克人 (2011) 『大震災の中で—私たちはなにをすべきか』岩波新書。